

富山県成長戦略会議 まちづくり戦略プロジェクトチーム

第5回 持続的な魅力ある田園地域検討専門部会 議事要旨

- 1 開催日時：令和5年8月22日（火）10:00-12:00
- 2 開催場所：片貝コミュニティセンター 毛勝の郷シェルピース
- 3 出席者（五十音順）

役 職	氏 名	備考
グリーンノートレーベル株式会社代表取締役	明石 博之	座長
ナチュラル美食セラピスト	荻布 裕子	
朝日町埋蔵文化財保存活用施設 まいぶん KAN 学芸員	川端 典子	
NPO 法人立山クラフト舎代表理事	佐藤 みどり	
合同会社山崎満広代表	山崎 満広	欠席

4 内容

(1) 事務局より資料説明

資料について戦略企画課より説明

(2) 委員発言要旨

<明石座長>

- ・私から会議資料について補足すると、資料1の3枚目の3つの丸は、前回の議論の終わりに、田園地域づくりの議論を進める時に3つのレイヤーで進めたらいいんじゃないかという話をさせてもらった。
- ・一つは、田園地域において表面化しているいろんな問題とか課題もあるが、例えば人材がいないとか技術が足りないから解決できないという状況に対応するものが「03」のボトムアップ型。
- ・また、既存の課題を解決するためのプロ集団というか、支援部隊が富山県全域で地域をサポートしてくれるような階層も必要だよねと。それが「02」の人材育成、人材サポートシステム。
- ・そして、田園地域の魅力発信となると、全国、世界に向けて、富山の田園地域はすごく素敵なんだよということを発信するための、外から見えるブランディングというか、外との交流が起こるような、そういう3階層が必要なのかなという話をした。
- ・それがベースになって、この3ページのような形になっている。

- ・ソリューション x については、この専門部会の皆さんの中では、田園地域の芸術祭という
と、「あーなるほど」と、既存の社会課題を解決するような取り組みの OJT なんだなって
いうのが理解してもらえたとしても、外部に発表する際に芸術祭と言うと、誤解が起こる
んじゃないかなと思う。
- ・そのため、芸術祭やりますというものではなくて、一旦、x にしておいて、でも結果的に x
としてふさわしいものが芸術祭なんですよっていう、順追って発信できれば、納得してい
ただけるようなものになるんじゃないかなという意味で、現段階では x としている。

<川端委員>

- ・将来的には実装するっていうところを目指すということなので、収益がなければ実装はで
きない。そうすると、収益モデルがないような事業はちょっと踏み込みにくいのかなとい
う感想。
- ・例えば、01 に書いてある、魅力の発信とか地域資源の発見とか、調べる事業は普段博物館
や教育委員会とかで行っているが、やっぱり収益とはなかなか縁がない。そういうところ
を実装するというのではなく、どこかの事業に散りばめていながら、それを置いてい
かないような仕組みになったらいいかなと思う。

<佐藤委員>

- ・この専門部会ができた時に、目標が風の谷みたいなイメージと聞いていたので、目標が
「世界から認められる田園」ということを自分の中に落とし込んだ時に、お祭りとかでは
なく、エネルギーをその地域で作ることができて、その地域だけでちゃんと賄うことがで
きる地域というのが、世界から認められる田園だと思う。また景観や環境にもちゃんと配
慮している地域というものが、これからの未来で認められる地域ではないか。

<荻布委員>

- ・資料1のボトムアップ型まちづくりについて、初年度と2年目、3年目以降と長期的にシス
テム化させていくというのが、すごくいいと思う。
- ・休眠預金等活用制度やトヨタ財団による助成なども意識されたのかなと思った。そういつ
たものとの違いを明確にするといい。トヨタ財団では心強いNPOなどに伴走支援してもらえ
ると聞いている。そのような外部の方からのサポートも得られるといいのではないかな。芸術
祭がソリューション x に置き換わったことで、より構造がイメージしやすくなったし、芸術
祭を仮説に置きながらも、もっとより良い形がまた生まれてくるといいのかなと思う。

<明石座長>

- ・03のボトムアップ型まちづくりは3年で終わるわけではない。これを初年度から募集して、各地域からプロジェクトに応募してもらって、選定して進める流れだが、このテーマが資料1の1ページにある求心力のある地域の創出と生業の再興となる。この課題に対して、これがしたいんですというものを計画・提案してもらおうわけだが、03の応募する内容自体とプロジェクトxとの関連性が、皆さん、まだ見えてない段階なのかなと思うが、それでいいと思っている。
- ・それをやりながら、01も同時にスタートする。この意味はxが、仮に今は芸術祭になるけども、さっき荻布委員が指摘していただいたように、それが最善の策じゃないかもしれない。より良いものが出てくるかもしれない。そのための基礎調査というか、現状調査を経て、それをまた議論していきたいなと思っている。
- ・01は、外からの視点というか、専門的・俯瞰的な視点で、今まで見えなかった田園地域の魅力を発掘しながら課題発掘をしていこうというもの。なので、この01は調査研究が長けているとか、ブランディングが上手な企業に参加してもらわないといけない。そのため、ここはまた別事業を立てて募集して、03と並行して地域の課題兼魅力の発掘調査をやっていくというような並走伴走型の事業であるということも補足させていただく。
- ・その後にはどんどん歩み寄って、いよいよ実装が必要なモデル、ボトムアップ型の選定されたプロジェクトに対してサポートチームが入っていくという感じになっている。イメージ湧きますか。

<川端委員>

- ・座長の進みたいイメージはすごくわかったが、それを支えていく人とか専門家とかいうものが、具体例が出てこなかったのだからわからなかった。ちょっとそれ、できるのかなっていうのがすごく心配。山崎委員が井波でやっているような形がモデルということか。

<明石座長>

- ・山崎委員のされていることは、02のイメージ。生業の再興まで到達してもらうためには、プロの人たちが入って支援する、単なる支援だけではなくて、プラットフォームとしてシステム化するというか、各地域の課題を持ち帰って、こうやってこれくっつけたらいいんじゃないのとか、こっちで足りない人材が別の地域にいるよというような、交差点となるようなイメージでいる。少数の専門家が一生懸命、県内を駆けずり回るみたいなイメージではなく組織で、という感じ。

<荻布委員>

- ・サポートする専門家についても公募なのか。

<明石座長>

- ・そこまでは詰められていない。イメージとしてすでに誰かいるわけではないが、おっしゃる通り公募をしたい。そうでないと、いい人材は集まらないと思う。たまたま知っている人に声をかけてできるチームって、たかが知れている。なので、富山県内にいなければ県外の方もありだと思っている。

<荻布委員>

- ・富山県出身ですごく優秀な、全国で活躍されてる方がいっぱいいるので、県外出身の方だけに限らず、富山県出身の方が故郷のためにみたいな流れが起きるのも理想の一つだと感じる。(※)

※補足；県出身で外に出ている方は、中の視点・外の視点を両方持っているということと、自身が県外にいながら富山に関わり、その後Uターンした経験から、自分のルーツとなる地域に新たな形で関わり、新たな視座を得ることはその方自身にも非常に良い経験になるし、回り回ってその方につながる県内在住者にとってもプラスになるものがあると感じるという趣旨。

<佐藤委員>

- ・補助金みたいなイメージとはまた全然違うものであってほしいと思う。補助金をもらって2年とか3年で終わるというイメージではなく、10年ぐらいを見据えたプランをつくってもらおう。そして申請の内容は、エネルギーと掛け合わせたプランにした方がいいんじゃないのかなと思っている。
- ・朝日町の小水力発電の記事に、県内で10か所ぐらい増やしていきたいと載っていた。そういう地域を選定してもいいのではないか。

<事務局>

- ・今ご紹介いただいた朝日町の笹川地区は、水道が公共のものではなく、井戸水を活用しているので、町が設置した上水道管ではなく地域で設置したものと聞いている。それが老朽化して更新する必要があるが、そのコストをどう賄うかという課題があった。
- ・笹川地区の上流に小水力発電ができるくらいの水源があり、その売電の収益を水道管の修

繕に充てていこうということで、エネルギーの地産地消と合わせて、そこで得た利益を地域の課題解決に落とし込むということになった。笹川では協力企業の方が、その地域に貢献したいという趣旨で実装に至っていると聞いている。

<知事政策局長>

- ・「10か所」については、小水力のような再生可能エネルギーは、どんどん進めていくしかないので、県内であと10か所くらいは実施できるところを発掘していきましょう、というもの。放っておいても実施は難しいので、個別に有望なところを10か所選定して可能性調査をやりましょうという取組みをしている。
- ・本専門部会で提示しているような事業と掛け合わせるという可能性もあるかもしれないが、まだそこまでは決まっておらず、まずは物理的に発電可能で収支がプラスになりそうな場所への実装をやっけいこうという段階。

<明石座長>

- ・佐藤委員から非常にいい指摘をいただいた。こういう事業をやる時に、行政は情報提供をしてくれないといつも思っている。小水力発電を10か所選定しようと思っっているんだっという情報があったら、それと絡めてうちの地域ってこんなことができるよねということが発想として生まれる。そのため、まず自治体ではこういうことに取り組みされているけれども、これについてまずご理解いただいた上でいい提案してくださいっていう方式でやれば、掛け算でいい提案が出てくると思う。
- ・情報がないままみんな手を挙げるので、それはあそこでもやっけるよみたいな重複があったりとか非効率になったりするんで、今回の03のボトムアップ型まちづくりの提案の時には、今県で取り組まれていることと、どうせだったらこう繋げた方がいいんじゃないかということ、逆に県庁の方からこういうのは使ってほしいというリストを出して公募するみたいな事業になってくんじゃないかなと思う。
- ・もう1つ、ボトムアップ型まちづくりのあり方みたいなものをしっかり議論できたらいいなと思っている。一般的な補助金を出してよろしくっていうものにしないでくださいというのは、おそらく皆さん同じ考えだと思う。どういうあり方がいいというイメージはあるか。

<川端委員>

- ・私は元々民間企業で働いていたので、補助金というものをあまり活用したこともないし、実は全然聞いたことがなかった。今の博物館に入って、補助金にも色々あるんだなと思った。私はそんなに補助金を使うことには悪いイメージは全く持っていない。

- ・例えば美術館だとか博物館っていうのは、町営であれば町の予算を使うが、それでは足りない部分は、なんとか財団の芸術基金を取るとか、文化庁の財源を取るとか、そういったことを別でやっていく。外部資源を獲得するっていうのは、それも経営だと思う。
- ・なので、私は結構積極的に文化庁の支援とかもらって大きなことをやりたいと思って、実際に取ったりもするので、別の外部資金を獲得していくっていう選択肢も閉じなくてもいいんじゃないかなという風に思う。
- ・そういう補助金を最初から申請をすることから始まる人は少ないと思うが、経営を学びながら、そういった補助もあるんだよっていうことを学べるようにするということなのかなと思う。

<明石座長>

- ・それも一種の稼ぐ力。

<佐藤委員>

- ・この「世界から認められる田園」というのが、結構私はしっくりきたところがあって、ソリューションxのところにも「世界から認められる田園」と記載すると目指しやすくなっていいのではないかな。

<荻布委員>

- ・望ましくない状態っていうのを想像した時に、よくある補助金だと多くの場合単年度の事業であり、3年計画とか5年計画をその申請書に書く義務があっても、実際補助金を出す側はそこまでは管理できないので、計画自体がずれていたり、途中で終わってしまったりというのが、よくあるケースだと思う。この「複数年度の伴走」というのは、とても大事なポイントで、これをどううまく運用させられるか考えられるといいと思う。また、ビジョン、目的、どういう価値を出すか、そのためにどんなアクションを起こすのが良いかなど、計画書を書くところからサポートしてあげられる機能があるといい。

<明石座長>

- ・確かにそういう計画書を書ける人がいたら、今頃バンバン出しているかもしれないので、計画書を作る最初の段階からのサポートが実は必要なのかもしれない。そういう人たちがいると、モヤモヤ考えてうまく言語化できないものを、計画書としてまとめることができるのかもしれない。
- 公募のやり方について、募集するだけではいいものが上がってこない。となると、やりた

いという意思だけを表明してもらって、そこに支援の手が入って行って、一緒に作り上げるという形が良いのでは。

<川端委員>

- ・資料1の2ページを見た時に、この獅子舞フェスとかが具体的すぎるなどと思って、どういう風にやっていくんだろうと思っていた。今聞きながら、そういう風に今の課題を持っている人たちが、まず、これが困っています、それで、なんらか頑張るつもりなので支援の手が欲しいですっていう段階で応募してもらうのがいいのではないかな。
- ・それでさきほど座長が言ったように、こういったことを地域でやっている、こういう人がいるとか、そういう勉強の時間を複数回設けていく。その勉強の時間を設ける中で、例えば県の取組みだとか地域の事例とかの中から、これと組み合わせようとかいうアイデアが地域の人から生まれて、伴走しているサポーターが事業化・収益化の可能性をアドバイスするといいいのでは。
- ・ある程度収益化できそうという見込みを持って始めないと、無理難題を押し付けることになってしまうので、そういう猶予の時間、辞めることもできるし、進むこともできるっていう期間を設けながら時間をかけて作っていくと良いのかなと思う。
- ・結局、手を挙げてもらって、計画書まで出してもらってというのは、絶対無理だと思う。そもそもそれができないから、今も課題がずっと継続しているわけであって。だから、もう困っている時点で手を上げられるって、すごくいいなっていう風に思っていた。

<佐藤委員>

- ・富山県の中山間地域への支援として、中山間地域「話し合い」促進事業という《①コミュニケーション支援》と中山間地域チャレンジ支援事業という《②実施への支援》がある。必要だからこそ、「話し合い」促進事業が存在しているが、現在手を上げる事が出来るのは地域の自治振興会などの組織のみ。もう少し柔軟に、地区を越えた形での「話し合い促進事業」が存在すると良いのにと感じている。

<明石座長>

- ・対象者がそういう枠組みになっていると。今回の事業はその点で差別化は図れそうな気がする。やりたいという意思を持っているが、組織化はしてないし、自治会などを形成していないという状況であっても、その1人の思いから大きなプロジェクトになることはたくさんある。
- ・個の想いをマスに集めて、計画書作りや情報共有の場があって、このロードマップに当てはめることができれば、今までとは違った人材発掘というか資源発掘になるような気がし

する。

<川端委員>

- ・すごく大事なことがあるなと思って聞いていた。やりたいって言う人がその地域単位の組織ではない単位で応募するとなると、それでも地域のことをやるのだから絶対地域の理解が必要。そこでオッケーが出なければというか、一緒にやりましょうという風に将来的にならなければ進めることはできない。
- ・私も経験があるが、やりたい気持ちがあっても、例えば自治会や町内会長さんにお話をしても、気持ちだけでは全然ダメで、ある程度具体的なことが見えてから説明をしていかないとダメだと思う。なので、そういう流れを作っておいた方が良かったと思った。応募は個人でもいいけれども最終的には地域のことから、そこを合意形成して地域と一緒にやるという条件とか考え方のルールが応募の要件として必要。やっぱり昔からその地域のことを考えている方に対して、今までのやり方がダメだという風に言うのは絶対できない話で、そこはうまく力を貸してもらったり、理解をもらって進めていけるようにしないとイケない。

<荻布委員>

- ・地域おこし協力隊の方も今県内にいっぱいいるので、うまく連携（※）できればいい。協力隊の方もせっかく来てもらっていても、なかなか活躍できないと思っている方もいると思う。そういった方のボトムアップにも繋がればいい。

※補足；協力隊の方は今までも個別に様々な研修に参加されて研鑽されていると思うので、この「連携」は、ただ応募の主体者になるとか、セミナー等に参加していただくだけではなく、何かこの事業のどこか幹を担う部分（赴任地域のキーパーソンの掘り起こし、地域内の合意形成プロセスのサポートなど）で声をかけても良いのかなというイメージ。結局は個人の人となりやスキル、個々の状況を見ながらになるが、外（県側）から隊員の方々に声をかけることで、仮にそれまでにその地域で内発的に役割を発揮できないような状況があっても、そういった外発的な機会によって、その方本来のスキルや人柄を発揮できる場合もあるのではないかという趣旨。

<明石座長>

- ・出発点は、地域おこし協力隊員などの個人が対象でもいいが、地域のことをやるんだから、その地域と真っ向対立した人を応援するわけにはいかない。なので、地域との合意形成プロセスを経なさい、ということ。そのプロセスにも専門家の支援が必要かもしれないな

い。双方の価値観の違をうまくすり合わせてくれたり、同じ方向を向いて、あたらしい計画と一緒に作ってきましょうみたいなサポートが必要なのかなと思う。

- ・今回の公募に関しては、今まで手を挙げられなくて、まちづくりに参加できないとか孤軍奮闘状態でなんかうまくいかないっていう人を救い上げるというか、プロジェクトの支援対象として拾っていきましょうよと。こういう取組みは他であまりやっていないので、とてもいい人たちが出てくるのではないかと思っている。
- ・私は、新潟の震災の時に支援側での取組みをたくさんやっていた。しかし、震災復興の莫大なお金があっても使い切れなかった。その理由は何かという、適正な規模の提案者がいなかったから。地域復興という、すぐに面的なことを求められるので、その合意形成に至るまでが実は1番支援が必要だった。新潟県庁の方もそこが必要だっていうのをわかってきて、国の大きなプロジェクトの前のサポート事業を作ってくれたものがうまくいった。
- ・今回のボトムアップというのは、すでに計画書を作る人がいる前提ではなくて、その前段階の人を拾い上げるものにならないといけない。

<佐藤委員>

- ・3年間の支援であるとして、例えば1年目は話し合いだけやります、そこをクリアしたら2年目以降も使えますみたいなステップアップ型でもいいのではないかな。

<川端委員>

- ・参考資料2の12ページ「5. 人づくりの課題－④県内外の取組み事例」の、例えばコーディネーター育成講座について、これに参加する方は、地域の課題を持っていないかもしれないけど、話し合いの進め方を学びたい方が来ると思う。こういったものと、今回の事業案を混ぜてみるということもできるのかなと思う。プロのコーディネーターをそれぞれの地域につけるっていうのは、すごく大変なことだと思うので、コーディネーターになりたいという気持ちのある人が最初から伴走しながら、OJTでやっていくっていうようなやり方もありなのでは。

<荻布委員>

- ・私もそういうイメージがあった。小さな地域で小さな生業を作るという切り口だと、また違う方が集まったりして、例えば主婦の方がちょっとした自分のアイデア、やりたいことを持ってきて、それを掘り下げていくと、実はそれって地域の課題解決や活性化に繋がるアイデアだよなということもある。単発の講座のようないろんな入り口を用意しておいて、講座に参加していない人も応募できるし、講座の中で発掘するということがあっても

いい。

<佐藤委員>

- ・参考資料2の12ページについて、どれが県内の例でどれが県外の例なのか。

<事務局>

- ・まち歩きワークショップは県内でも、市町村単位で行われている。コーディネーター育成講座とテーマ別のまちづくり講座は、新潟県のNPO法人まちづくり学校の例。ソーシャルカフェは滑川市のメリカでの例。
- ・テーマ別のまちづくりに関しては、富山県の中山間地域対策課でも、例えばチラシの制作講座などを実施している。地域おこし協力隊サポートは兵庫県の丹波篠山の例。地域での起業支援プログラムは、みらいまちラボさんやHATCHなどをイメージしている。
- ・地域滞在型職業訓練は、徳島県の神山塾の例で、座学と企業での実習とキャリアコンサルタントによる相談などを組み合わせたもの。
- ・リノベーションスクールは、高岡商工会議所を含め全国で行われている。空き家をリノベーションする手法を学んで、その事業計画の作成とか事業化まで繋げる講座。

<明石座長>

- ・今、人材がたくさんいるわけじゃないので、コーディネート・ファシリテーションできる人を外部から連れてくるのもいいが、限界がある。そういう部分こそ、02のなりわい創造プラットフォームづくりの中で、次なる富山で活躍するファシリテーションできる人材を育成する場にもなったらいい。
- ・そこで03とうまく連携をして、02によって03の地域の人たちがうまく実装するためのサポートをするんだけど、02の中でもサポートする人たち自体を育成するというようなあり方もいいのかなと聞いていた。

<佐藤委員>

- ・ファシリテーターの養成講座みたいなものがあつたみたいだが、私には情報が届かなかつた。知っていたら参加したかった。いい企画の情報が届いていないということも事業案に入れてもらえれば。

<事務局>

- ・ファシリテーター養成講座は、昨年度まで県の中山間地域対策課で実施していた。今年度は広報に重点を置いて、伝わるチラシの作り方という講座を実施している。

<佐藤委員>

- ・とてもいい内容なのに、そんなに集まらなかったみたいだに聞いた。求められているはずなのに。

<明石座長>

- ・それは残念。これに限らず、どこを見たら情報が集約しているかというホームページなどが今のところない気がする。移住はまとまった感があるが、県内の人々が我が県のまちづくりに関するいろんな情報を知ろうというサイトが恐らくないはず。
- ・富山県庁のトップページから、今の公募とかは見えるが、網羅的なものではなくて、私も全体像は全く把握できない。移住のプラットホームみたいなものが、県内まちづくりでもあったらいいんじゃないか。

<佐藤委員>

- ・次年度のやることとして、情報がまとまったホームページを作るというのも入れ込んでどうか。

<荻布委員>

- ・まち歩きワークショップについて、今年、県の観光課で8月ぐらいに公募された似たような取組みがあった。また、うちが農家になってから届くチラシや農林振興センターから電話があって、初めて知る講座もある。それとは別に例えば県のデザインセンターに用事があるて行くと、こんな面白い講座やってたんだみたいなこともある。
- ・打ち出す場所が別々になっていて、すごくもったいない。見方次第ではあらゆるテーマがまちづくりと関わるので、観光塾の講座にしても、農商工連携のセミナーにしても、ただその特定の対象だけでなく、いろんな人に聞いてもらった方がいいのではという内容だったりする。

<佐藤委員>

- ・まちづくりのページに盛り込む内容として、富山県内の地域おこし協力隊の活動を紹介します。

る「とやまの地おこかわら版」いう、しっかりした内容で作られている情報もある。それも多分関係者しか見ていない。そういったものも残せると良い。

<明石座長>

- ・02のプラットフォーム作りについてご意見いただきたい。実はまだ私も具体的なイメージはできていない。器だけ作ってみた感じ。

<佐藤委員>

- ・これは「しあわせデザイン」と絡むのか。

<明石座長>

- ・個人的には絡んだ方がいいと思っている。せっかくできる中間支援団体なので。
- ・まちづくりPTとも絡みそうだが、本件は田園地域づくりに特化した形でやろうと思っている。どんな支援の手が必要なんだとか、単にイベント成功に導くだけじゃなくて、その先にある自走できるところまでどうやって持っていくかという、そういうプラットフォームづくりなので、こういうところに情報発信もあつたらいいかもしれない。

<佐藤委員>

- ・補助金の申請の仕方も載せてほしい。

<荻布委員>

- ・例えば、古民家を直すとき、農家民宿・民泊をやりたいとき、といったように目的別にノウハウだったり相談先がまとまっているホームページがやっぱり必要。
- ・様々な軸をまとめてほしい。そして、事後の開催報告として、こんなことやりましたとか、こういう人に会いましたよ等のレポートとかも載っているとより良いんじゃないか。
- ・先ほど帰農塾の話が出たが、これを今回のプロジェクトと合わせて考えると、きっと帰農塾で会える地元の人たちって、地域のリーダーの方々が選ばれていると思う（※）。
- ・一方で、この帰農塾の案内は、県内にも各所にチラシが置かれているが、県内に住んでいると、内容が県外の田舎移住希望者むけに書かれていて、これ参加していいのかなと感じる。多分、本当に熱意を持って、ここのNPOに電話したら、多分いいよと言ってくれるが、例えば1日だけ様子見で参加したいとか、気軽には参加できない感じがする。

※補足：帰農塾の開催地に選ばれている地域のリーダーはいわば中山間地のキーパーソンであり、こういった方々に会いに行くことは、地域でプロジェクトをやりたい方や、地域のリーダー的な役割をすることになった方にとってプラスになるのではという趣旨。

<明石座長>

- ・帰農塾のような取組みと今やろうとしているものが決定的に違うのは、やっぱり伴走型で、テーマがまちまちというものに対してプロの支援を得て、ネットワークもしながら、マーケットにいる人と繋いでみるとかっていうのも交えて実装していこうというところ。そういうトータルの支援部隊なので、決められた日があって、そこに参加して勉強会というものとは違う。勉強会のタイミングもあっていいと思うが、基本のスタンスが違う気がする。

<荻布委員>

- ・例えば、6次産業に関して言うと、他の県だと6次産業支援センターみたいのがあって、そこにサポーターの名前があって、その人を指名して相談できる。富山県も6次産業化支援には力を入れていると思うが、誰に相談していいかすぐわかる仕組みについては、なぜないのかなと思っていた。
- ・なりわい創造プラットフォームのところで、いろんな専門家に直接連絡がいいのか、県で繋ぐのかわからないが、相談できる仕組みがあればいい。もうすでに課題が明確になっている人のやり方になってしまうが、そういう機能もあつたらいい。

<明石座長>

- ・富山県で創業に対する支援は、もちろんある。しかし、田園に特化してないっていうことと、相談員の方が中小企業診断士とかで、「やりたいけど、どうしたらいいかわかんないんですよ」みたいな人たちに対して伴走できるタイプの人とは、また違うのかなっていう気がしている。そればかりやっているようなプロの人たちがここに溜まっているようなイメージ。
- ・01のイメージはできるか。

<荻布委員>

- ・先ほど課題や魅力発掘については企業に委託される可能性を言及されたが、田園の魅力、特になかなか気づかれないようなものを発掘するとなると、狭い地域に区切って、何社か

必要なのかなと思う。外部から入ってちょっと視察するぐらいだと全然わからない。結局表に出てる情報しか拾えなかったりするので、その企業の選定も結構難しい。

<明石座長>

- ・こういうものを公募して、ぱっと手を挙げる企業は、県内にはあまりいない。調査する体力もあってノウハウもある企業として、県外のあまり富山に関心がない企業でも応募してくれると思う。それはそれで悪くはないが、どういう人が、どういう切り口、感性を持って関わるか、日ごろ富山のことをよく知っている人が関わるかが重要。募集の仕方は非常に難しい。

<川端委員>

- ・結局、その調査研究をした内容を、どういう形でアウトプットするのかっていうのが、まだ見えていない。もし、これだけだったら大学の役割なのかなっていう気がする。

<明石座長>

- ・この専門部会にフィードバックがされて、02とか03との連携をどうしていくかっていう風に考え、仮説として置いたソリューションxが、調査した結果、正しかったかどうか検証をしないといけない。より良いものが見えてきたとか、03の内容を02の支援を得て実装していこうとする中に、このxをどういうふうに絡めるかということが、次に必要。この先は、まだしっかり決まっていない。
- ・大学に頼むのはいいような気がするが、大学のゼミで学生を使ってフィールドワークするという部分的な協力になるのでは。01の必要性は皆さん、そうだなって思ってると思うが、どんなところに依頼するかは吟味が必要。

<川端委員>

- ・地域の資源、地域の文化については、どこまで深めるかによってかかる時間が違う。収益性を考えることを03で担うとすれば、01の調査では県内全域を対象にしてあまり深くない調査にしてはどうか。どういった資源があるかという項目をおさえておいて、それを収益性のある事業としてモデル地域にどう生かすかというところは03でやってもらうとか。01はとにかく早くやらなければいけないと思うので、人海戦術的なイメージを持った。

<佐藤委員>

- ・初年度は全ての計画の実行を目指さなくていいような気がする。ホームページを充実させるとか、調べた内容をそのホームページの中に落とし込むとかで、結構それでいっぱいいっぱいではないか。3年計画ではなく、話し合い事業の公募から始めてはどうか。

<明石座長>

- ・とてもいいと思う。いきなり募集じゃなくて、話を聞く場だったりとか、課題を発見する時間も必要だと思う。01には、景観のレギュレーションとかを盛り込んでもいいと思う。

<川端委員>

- ・すごく単純だが、外からの評価を得る時に、単純に景観が美しくて食事が美味しければ、人は来る。誰かがやらなければじゃなくて、やれそうなところは、もうこっちで解決することも必要。

<明石座長>

- ・そういう意味では、この01に盛り込むことができている。この専門部会で推薦枠があって、あの地域に行ってみたいというような。外部委託する企業よりも私たちの方が地域をよく知っているわけだし、そういうのもありかなと思う。